あなたはどこへ行くのか

奨励	越川 弘英〔こしかわ・ひろひで〕
奨励者紹介	同志社大学キリスト教文化センター副所長 同志社大学キリスト教文化センター准教授
研究テーマ	キリスト教の実践神学（礼拝・宣教・牧会）

主はこう言われる。
「さまざまな道に立って、眺めよ。
昔からの道に問いかけてみよ
どれが、幸いに至る道か、と。
その道を歩み、魂に安らぎを得よ。」
しかし、彼らは言った。
「そこを歩むことをしない」と。

（エレミヤ書　六章一六節）

イエスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。」

（ヨハネによる福音書　一四章六節）

「あなたはどこへ行くのか」

人生というのは、意識するしないにかかわらず、現在進行形で進んでいます。それは私たちが好むと好まないとにかかわらずそうなっているのであって、こうしている間にも時間はどんどん進み、私たちは刻一刻と時を過ごしており、日々歳を重ねていくのです。

思えば、人生というのは私たちが意識して、あるいは欲したり願ったりして「始まった」というわけのものではなく、ある日、気づいてみたら生まれてきてしまっていた、生まれさせられた、生きていた、生きていかざるをえないという、言わば「受け身」の出来事です。そうして生きていって、いつかどこかでこの人生が終わるまで、私たちは生きていかなければならない、進んでいかなければならない、歩んでいかなければならないという「定め」のもとに置かれているのです。

皆さんは、自分の人生の目的は何だと考えておられるのでしょうか。

人生の「目的」です。「目標」ではありません。「目的」と「目標」は全然違うものです。

「目的」というのは最終の到達点、人生の最後の「的（まと）」のことであり、「目標」というのはその「目的」に至るための通過点であり、「目当てとすべき道しるべ」のことです。「目標」は人生の一応の区切りであり、目安にはなるけれども、それが「目的」に取って代わるということはありません。

けれども、私たちは往々にして「目標」を「目的」と勘違いすることがあります。「目標」に到達できなかったことを「目的」を達成できなかったと勘違いして人生に絶望してしまうようなこともあるし、反対に、「目標」に達しただけなのに、「目的」に到達したかのように有頂天になってしまうこともないわけではありません。人生の問題は時として、この「目標」と「目的」の取り違え、勘違いから起こることもあります。

さて、「目的」に到達するための道筋、道しるべというのは必ずしもひとつしかないというわけではなく、いろいろな「目標」を立て、いろいろなルートから、最終的な「的」に達するということも起こります。

人生においてどんな「目標」を立てるかということも確かに大切なことですが、いちばん肝心なことは「目的」をしっかりと見定めることにあります。しかしそれは、実はたいへん難しいことでもあります。とりわけ現代という時代に生きる私たちにとって、人生の目的を見定めることは、ある意味、拷問にも近い苦しみや葛藤を引き起こす重い課題ですらあります。

なぜなら、まずその理由の第一として、先ほども言ったように、私たちはそもそも、そういう「目的」を自分でしっかりと決めた後で、初めてこの世に生まれてくるという順序を踏むわけではないからです。生まれてきてしまった、生まれさせられてしまった、今現に生きているという、現在進行形の生のただ中で、進みながら、歩みながら、あるいは流されながら、私たちは人生の「目的」を、後になって、見定めなければならないという境遇に置かれているからです。言わば、私たちは自分が望んだわけでもなければ、意図したわけでもない、向こうからやって来た人生というものに対して、それを「自分の人生」として引き受け、その「目的」、その意味について、こちらから回答していかなければならないという宿命を負わされているのです。

第二に、現代の私たちが、とりわけ人生の「目的」を見定めるのが難しい理由として、近現代の人間中心主義的な思想のもとでは、すべてのことが私たち自身の責任においてなされるべきだという理解があるからです。言い換えれば、現代人は、人生の目的もまた私たちが自分で考え、自分で決め、自分で到達すべきものであるという「常識」のもとに置かれているからです。自分の人生にすべて「自己責任」を負うという現代人の宿命は、ある意味で悲劇的なまでの重荷となることがありうるのです。

近現代人の不幸

ところで、キリスト教においては、そもそも人生の「目的」は人間が自分で考え出すものであるとか、自分で決めるべきものであるとは理解していません。神が人間を創造されたという聖書の物語が告げることは、人間という存在の根拠、存在の理由、存在の目的は、人間自身に内在するのではなく、むしろ「外から」、つまり神のもとからやって来るという理解なのです。

近現代の人間理解によれば、人間とは自主自立の存在であり、自然や世界からは独立した一箇の独自の存在、知恵と知識を拠り所として自らの生を自らが選びとり、決定し、前進していく存在であると「信じられて」きました。しかしこれもまた長い歴史のなかにおけるひとつの「人間理解」であり、「人間哲学」であり、また近現代におけるひとつの「信仰」であると言って過言ではありません。

近現代の人間は、神から自立した、神なしで生きることのできる人間となり、果ては「神は死んだ」とまで豪語してはばからないような存在になりました。「神からの解放」、それが近現代における人間の誇りであるとすら考えられたのです。人間は自分で考え、自分で生き、自分で自分の人生の「目的」を決定する存在となりました。

近現代人の特徴は、「自分」といった存在や意識、それに類する言葉に凝縮されると言えるかも知れません。たとえば、日本語で、この「自」という言葉の付く単語を思いつくままに挙げてみましょう。

「自分」「自我」「自己」「自主」「自立」「自治」「自由」・・・。

これらは近現代にあっては、すべて肯定的積極的な意味で用いられてきた言葉です。近現代にあっては、そのように自分のことを自らの能力で自己決定できる人こそ、まさに「人間」であり、もっとも強い、もっとも優れた、もっとも理想的な存在とされてきたのです。

これと反対に、従属したり、依存したり、支配されたりすること、思いのままにならないこと、不自由なことは、マイナスであり、否定されるべきこと、軽蔑され、「悪」であるとさえ、みなされるようになったのです。

私は、学生時代に学んだサルトルの実存主義の思想の中で、「人間とは人間自らが造り上げるところのものであり、自らが生み出すところのものである」という主張が力強く語られていたことをよく覚えています。

しかし、自らを造り上げ、自らを生み出すという、この主張が、すさまじいばかりの「力業」を私たちの人生に要求すると共に、私たちがその「力業」を生涯にわたって延々と、死ぬまで続けていかなければならないという主張は、サルトル自身にとっても、人間存在の英雄性と共に悲劇性として映っていたように思います。それは究極的な「自己責任」の思想と言えるかも知れません。

若い頃に、そうした「人間とは自らが造り出すところのものである」という思想を学んだことは良いことであったと、私は今でも思っています。たしかに人生にはそういった一面もあるからです。

しかし、それがすべてとなってしまったら、どうでしょうか。

私たちの人生は一瞬たりとも気の抜けない、恐るべきものとなってしまうことでしょう。いったいすべての人間がそんなすさまじい生き方を徹底することができるのでしょうか。むしろ負いきれないほどの重荷を背負いながら、やがては遅かれ早かれ、私たちほとんどすべての者が、その重荷に押しつぶされていくような、人生を送ることになるのではないかと思います。

私はサルトルの実存主義のような思想とは、ある意味で、神を見失ってしまった近現代人が行き着かざるを得なかった必然的な結果であり、何と言うか、近現代の人々の寂しさや悲しみを反映した思想なのではないかと思うことがあります。

実存主義に限らず、神を殺してしまった近現代人の人生においては、私たちの傍らに寄り添い、私たちを深い配慮と憐れみに満ちたまなざしで見つめ、私たちに向かって「あなたは

どこにいるのか」という問いかけを投げかけてくれる存在を見出すことができません。そこに神がいないとすれば、私たちは自分で自分を問い、自分を叱咤激励したり、自分で自分をほめてあげるしかないのです。しかし、その孤独はなんと深く、またその声はなんと空しく響くことでしょうか。

私たちの存在の根底において私たちを絶対的に肯定してくれる存在をもたず、私たちの人生と存在を絶対的に認めてくれる存在をもたない人間は、絶対的に不幸です。

「あなたのうちに憩うまでは」

神が「あなたはどこにいるのか」と呼びかけるとき、それは神が関心を寄せつづけていてくださるということを意味しています。そしてそれは、「あなたのいる場所」、それがどこであっても、私はそこに共にいる。あなたがその人生において、どこに行こうとも、私もまたそこに共に行く、という神の決意を現しています。

神は愛をもって人間とこの世界を創造されました。

「愛をもって」というのは、神が最後まで私たちを見捨てないということであり、神が私たちのために最終的な責任を負ってくださるということです。

それは言い換えれば、だからもはや私たちは自分で自分のことを最後まで汲々として思い悩む必要はないのだということであり、自分で自分を造り上げるしかないのだという重荷から解放されるということです。

私たちの人生の出発点は、神が私たちを愛をもって創造されたことから始まったのです。それが私たちの人生の「原点」です。それゆえにまた私たちの人生の内容、その「目的」とは、神と共に生きるということ、それ自体にあります。

たしかにエレミヤ書に語られているとおり、人間はしばしば「その道」、神の指し示す道を歩もうとしないことがあるけれども、しかし、神はそのたびに私たちに問うのです。

「あなたはどこにいるのか」、「あなたはどこへ行くのか」と。

私たちがどこに行っても、神は（たぶん多少はあきれ顔をしながらも）その問いを繰り返し、私たちに問いかけ続けてくださるのです。

「あなたはどこにいるのか」、「あなたはどこへ行くのか」。

これが神の愛です。

この神の愛は、神が独り子であるイエス・キリストをこの地上に遣わし、私たちと共にいるようにしてくださったことによって、その頂点に達しました。

ヨハネによる福音書の中でイエス・キリストは語ります。

「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」（一四章六節）。

イエスご自身が「道」であり、イエスご自身を通って、神のもとに至るというのです。あえて言えば、イエス・キリストという存在を踏みつけながら、イエス・キリストの上を歩いて、私たちは「父なる神」のもとへ進み行くというイメージでしょうか。

「あなたはどこにいるのか」と尋ねてくださる神はまた、私たちの目指すべき人生の「目的」をしっかりと指し示すばかりか、その「目的」に至る「道」である独り子を私たちに与えてくださり、その上を歩むことをお許しになった方でもあるのです。

私たちの人生とは、そのように神から問いかけられながら、神の備えてくださった「道」を歩み、私たちを創り、愛し、見守り、共に歩みつづけ、そして待っていてくださる方のもとへ到達するという道程に他なりません。

だからこそ、古代における最大の神学者と言われるヒッポのアウグスティヌスは、自伝的文書である『告白録』の中で、よく知られている次の言葉を記したのです。

「〔神よ、〕あなたはわたしたちを
あなたに向けて創られました。
そのためわたしたちの心は、
あなたのうちに憩うまでは
安らぎをえません。」（『告白録』一巻一章一節）

人生におけるその他のすべての出来事は、この「目的」に達するための「目標」にすぎません。

この道は直線的に「目的」に通じているとは限りません。アウグスティヌス自身の人生がそうであったように、時にそれは「回り道」であり、「寄り道」であり、あるいはまた「迷い道」に見えるときがあるかも知れません。しかし、イエス・キリストがその「道」である限り、いずれにしても、やがてその道は神の愛へと達する道なのです。

私たちの人生は、神の愛による創造に「原点」をもち、その「目的」はまさにその神の愛へと立ち帰ることにほかなりません。その「原点」と「目的」の間の時を生きることによって、私たちはいろいろな人間と出会い、いろいろな課題や経験を重ねながら、神の愛の豊かさと複雑さ、私たちに対する神の恵みと憐れみの計り知れない高さ、広さ、深さを味わうのです。

それは近現代人が見出した、神を追い出すことによって得た、孤独や空しさ、悲しみや寂しさとはまったく異なる世界であり人生です。

「あなたはどこにいるのか」「あなたはどこへ行くのか」。

私たちに問いかけ、私たちを愛しておられる神のゆえに、私たちの存在と人生は絶対的に肯定されているのであり、私たちは今日も生きることができるのです。

二〇一一年一月十九日　京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録